

目加多 龍 『学校教育における共生と競争』

【研究テーマについて】

「格差社会」が今の時代のキーワードになっています。国民の間で経済格差がますます拡大し、一方では六本木ヒルズの IT 長者が年間数億円の収入を得ているかと思えば、他方ではフリーターが年間 100 万円前後の収入しか得られないという二極化が進んでいます。そうした格差拡大を生み出すひとつの装置が学校教育にあることは確かです。学歴・学校歴によって、得られる収入は大きく違って来るからです。

この論文は、学校教育に新たに導入されている競争原理がさらなる格差拡大に結果するであろうと述べています。

学校教育による経済格差や社会階層の再生産は、教育社会学が昔から実証的に明らかにしてきた問題ではあります。しかし、この論文は単に一般論として学校教育の社会的選別機能を論じようとしているのではなく、現在進行している学校教育改革が、これまで学校教育にあった「共生」と「競争」のバランスを崩してエリート選抜の「競争」に偏る結果、エリートのためだけの学校教育となり、教育が本来持つ公共性を失いかねない、ということの問題にしています。重要な問題提起だと思われます。

確かに、学校教育には一方に競争・選別機能を持ちながら、他方では友だちとの協調・助け合いを学び、社会性や民主主義を体得する「共生」の原理を有していますし、理念として教育の機会均等を掲げていますが、「共生」が希薄になってギスギスした「競争」ばかりになってしまえば、さまざまな弊害を生むことは明らかでしょう。家庭の所得や住む地域が教育機会の格差を広げ、公正な競争の前提条件も失われつつあります。

筆者は学校選択制度や習熟度別クラス編成、義務教育国庫負担金削減による地域格差を問題として挙げていますが、これらが後に何をもたらすことになるのか、私たちは今後の動向を注視していく必要があるでしょう。

学校教育における競争の弊害は、比較的理解しやすいのですが、それでは「競争」に対置される「共生」とはいったい何を意味するのかというのが、この論文の中ではあまり明確になっていないのが残念なところです。さらに「競争」と「共生」の調和というのはどういうことなのか、具体的なイメージが示されていません。あくまでも「共生」と「画一」は違うもので、「共生」は個性を互いに認め合い尊重するような関係性だと思います。

「共生」とは具体的に何か、「競争」と「共生」の調和とはどういう姿なのか、を今後も考え続けてほしいと願っています。

【研究方法について】

筆者が塾講師をしながら得た問題意識がこの論文の出発点となっています。筆者の原体験はじつに大きな意味を持つものだと改めて感じました。もともと教育学を学んでいたわけではなかったので、出発点における基礎知識不足のハンディは大きかったと思いますが、学校教育の問題を幅広く学び、論文にまとめた努力は、高く評価したいと思います。